長滝祥司（ながたきしょうじ）

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第35号
学位授与年月日	平成8年3月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 実践哲学専攻
学位論文題目	真理の起源――超越論的主観性の現象学と知覚論的世界生の現象学――
論文審査委員	（主査） 教授篠　憲二　教授柏原啓一 教授野家啓一

論文内容の要旨

本論文の目的

まず、本論文の目的を要約しておこう。それは、19世紀から20世紀にかけて絶対視され、今日でも極めて広範な勢力圏を持つ自然科学の方法論によって構築された科学的世界像や自然科学的な真理を現象学的方法によって相対化し、それらに代わる始源的な知覚世界とそこに生起してくるロゴスを解明することである。したがって、私は『真理の起源』という標題を本論文にあたえたい。これは、メルロ＝ポンティが彼の未完の大著に当初あたえようとしていた標題の候補のひとつである。最終的には『見えるものと見えないもの』に落ち着いたが、当初の標題が示唆するように、この遺著は始源的な知覚世界を現象学的に記述した『知覚の現象学』を存在論的に取り上げなおすとともに、『知覚の現象学』が掘り下げなかったロゴスの問題（ここには「客観性」や「理念性」といった問題が含まれている）の探求をも予告していた。もっとも、本論文は存在論的な探求を主眼に置いているわけではないが、＜始源的な知覚世界＞と＜ロゴス＞の現象学的探求という――メルロ＝ポンティの遺著と共通の――問題圏において展開されることになるので、『真理の起源』という標題をあたえることができる。一方、「超越論的主観性の現象学と知覚論的世界生の現象学」という副題は、フッサールの現象学とメルロ＝ポンティの現象学の特徴を端的に表現したものである。これを副題として選んだのは、本論文を貫くもうひとつの問題意識がフッサールとメルロ＝ポンティ

の思索の差異を明確にすることだからである。

本論文の問題圏

フッサールによれば、数学的自然科学を模範にして事物や世界を捉えていこうとする態度は、ガリレイとともに明確なかたちで始まる。科学が数学化という方法を採用する根拠は、われわれの流動的、相対的な日常の知覚経験の世界の基底には数学的な法則によって把握される客観的な秩序——いわゆる科学的な真理——が存在しているという信仰にほかならない。世界や世界内のすべての事物を数学という言語によって捉えようとするガリレイの近代的自然観においては、数学化という方法の網の目からこぼれ落ちてしまうものはすべて捨象される。たとえば、流動的な知覚経験や精神性に関わるもの、事物に生じてくる文化的な意味などである。なかでも特筆すべきは、本来、事物や世界と密接に関わりそれらを意味づけ捉えているはずの人間的主観が、ガリレイ的な自然の内部には場所を持たないということであろう。この主観と客観との分裂、あるいは意識と自然との分裂によって、歴史的にはデカルトの「思惟するもの」と「延長するもの」の二元論が招来されることになる。自然科学の対象は前者の延長するものに限定され、とくに第一性質を対象とした物理数学的自然科学は未曾有の発展を遂げる。

自然科学が隆盛を極めた19世紀には、人文科学の方法論においてすら、精密な自然科学を模範とし、数学的自然法則によって事物を数量化して把握するべきだという風潮が高まってきた。19世紀末頃のヴントの要素主義的心理学を嚆矢とする実験心理学などは、人間の心理的現象までも数量化して説明できると考えており、そこに実証科学が人文科学にあたえた影響の極限形態のひとつを見て取ることができる。心理学は哲学から独立した固有の自然科学たらんとして、「実験」という方法によってその自律性を確保しようとした。自然科学への無批判な信頼を支えるイデオロギー的な支柱は、<実証主義>という名で呼ばれている。実験心理学にかんしていえば、心的過程についての仮説を法則として立て、その妥当性を実験によって検証していくという方法論に実証主義的態度がそのまま見て取れる。では、実証科学を目指した心理学は、こうした科学主義的、実証主義的な方法論によって人間の心的状態を捉えていくことになんの疑問も抱かなかったのだろうか。実際には、心理学は自然科学を志向して以来、つねにおのれと自然科学との関係や心理学の科学性について考え続けており、心理学が科学である理由と方法を説明することに執心してきた。ここには、心理学が哲学から独立した歴史の浅い学問であるからといった、皮相な説明だけでは処理しきれない問題がある。われわれが意識せねばならないのは、心あるいは意識というものを対象にすることに付随する根本的な問題にほかならない。

実証的心理学へのこうした疑念の基底にあるものをそのまま剔りだして見せたのが、フッサールの現象学である。20世紀初頭に登場したフッサールの現象学は、ディルタイの生の哲学と同様に、実証主義に支えられた科学万能主義への反動でもあった。とくにフッサールは、「学問の理念をたんなる事実学に還元する実証主義的傾向」を「学問の危機」として捉えている。こうした危機的状況を打開するためにフッサールが意図したことは、自然科学的理念に覆われた即自的自然の基底に横たわる、より基礎的で根源的な自然の固有の権利を回復することである。フッサールはこの根源的自然を「生活世界（Lebenswelt)」と名づけている。また、この根源的な自然の権利を回復することは、同時に自然科学の呈示した法則性の有効範囲を限定することになる。そこで目指されてい

ることは、生活世界を露呈し、それに固有のロゴスを解明してみせることである。

フッサールの発した科学万能主義への警告を、さらに先鋭化させたかたちで引き継いでいるのがメルロ＝ポンティである。彼はフッサールが現象学の態度にあたえた＜事象そのものへ＞というスローガンを、まずなによりも「科学の否認」として捉え、さらには科学を「偏見」とまで言い切っている。ここでいう科学とは、事象に即した歩みにおいて現象学的探究とも収斂していくような科学ではなく、実証主義に支えられた自然科学のことである。彼によれば、そうした科学はわれわれの直接的な世界経験の二次的な表現でしかない。彼は、世界を規定するひとつの方法にすぎない科学を絶対視する風潮に異議を唱え、自然科学の描く科学的世界（像）を知覚世界の「貧弱な画像」とみなす。それは同時に、科学の意味と有効範囲を正確に評価することでもある。したがって、メルロ＝ポンティは科学の成果をすべて反古にするという意図を持っていたわけではない。彼自身、コフカのゲシュタルト心理学やゴルトシュタインの生体・精神病理学、ユクスキュルの環境生物学など、多くの科学的知見から貴重な哲学的示唆を受けている。それでもメルロ＝ポンティにおいては、自然科学やその旗印である客観性に対する批判的な調子がまさっている。とくに理念性の問題を探求するときなどは、精密科学の有する学問的な理念性に対するスタンスの取り方において、フッサールとの著しい対照さえうかがえる。フッサールは学問的理念性を理念性の最高形態として捉えていくのであるが、メルロ＝ポンティは文学や芸術によって捉えられるような理念性を積極的に考察している。こうしたことから、自然科学への批判的態度という点においては、フッサールのそれを凌駕するものであったといえよう。

この「科学の否認」はいかなる内容を持つものなのか。それは、科学が実証主義というイデオロギーと数量化という方法論とを絶対的なものと見なしていることに向けられる。科学的な世界観では、知覚が相対的で流動的なのは、それが＜不完全な＞ものだからだとみなされる。科学は客観性という概念を規範化することによって、移ろいやすい知覚を二次的なものとする。心理学実験室での訓練された知覚（あるいは捏造された知覚というべきか）を真正の知覚と見なすような、素朴実証主義的な知覚心理学の方法態度に、生きられた知覚を忘却した極限形態のひとつを見て取ることができる。いわゆる不正確な知覚はすべて排除され、科学的な数量化によって捉えられた＜真なる＞科学的実在に限りなく近い（あるいは一致していると考えられる）知覚こそが正確な知覚ということになろう。ここには、自然科学によって発明され規定されることが現実に存在することのすべてである、とする科学主義がある。このような科学主義にとっては、知覚も事物も世界さえも共通の数学的な法則に貫かれた透明なものである。だが、自然科学の根本的な誤謬は、知覚が「生の関わりのなかで、しかもいっさいの理論的な思惟に先だって」あることを忘却しているということにほかならない。またそこでは、必然的に奇妙な逆転が起こる。それは、知覚世界に起源を持っている科学法則（あるいはその法則の持つ学問的 - 科学的理念性）によって知覚そのものを説明するという転倒である。この転倒に気づいたメルロ＝ポンティは、科学の創造した「客観的世界の手前にある生きられた世界（le monde vécu）」に立ち還ることを目指している。これはちょうど、フッサールの「生活世界」への還帰という問題意識に相当する。

以上、フッサールとメルロ＝ポンティが開いた現象学の問題圏のひとつを素描してみたわけだが、本論文の目的は、この問題圏のなかに入ってくると思われるほかの哲学や人間諸科学の知見を踏まえながら、彼らの探求してきた問題を私なりに深化し展開することである。その際、現象学という

名で包摂されながらも、両者の思索のなかにある根本的な差異を意識的に解明することをも課題としている。

本論文の具体的な内容

フッサールやメルロ＝ポンティが「生活世界」あるいは「生きられた世界」といった概念によって開いた問題圏に立ち入っていくとき、まずなさねばならない基礎的な作業は、自然科学によって＜理念の衣＞をかぶせられ、そのたんなる対象、＜平板な即自＞となったわれわれの直接的な経験の世界をその豊かな姿において回復することである。このことは同時に、身体と精神とが分かち難く結びついた存在である人間的主観の地位を確立することでもある。第一章では、科学的世界から排除された人間的主観――始源的な知覚世界に住まう主観――の正当な地位を確認し、それと始源的な知覚世界との関係を探求している。とくに本章では、視覚と触覚という感覚に焦点をあて、それらが持つ固有の哲学的、現象学的意味を探りながら、始源的な知覚世界と人間的主観との両義的、逆説的な関係を積極的な解明にもたらすことを目指した。視覚と触覚という感覚に焦点をあてているのは、両者において人間と世界との関わりの様態がよく素描されているからである。視覚は事物をそれとして認識する際にとりわけすぐれた能力を発揮する感覚であり、人間が世界を像として対象的に把握する自然科学的な認識へと繋がる基盤となる感覚である。これに対し、触覚はわれわれと事物や世界との共在を告げる感覚であり、しばしば触覚的な比喩によってわれわれと事物との密接な関係が示唆されている。ここでは、こうした触覚的な比喩をも手がかりにして人間と世界との根源的、基礎的な関係を探求している。一方、フッサールがある書簡のなかで表明しているように、彼の現象学は＜見ること＞の徹底である。「世界を見ることを学び直す」ことを現象学的態度としたメルロ＝ポンティの現象学においても、＜見ること＞がモティーフとなっている。ただし、後者においては世界と人間主観とのより直接的な関係がしばしば触覚的な比喩で記述されている。つまり、メルロ＝ポンティの現象学においては＜触れること＞がより根本的なモティーフである。両者のこの相違は人間主観と世界との関わりを記述する際の決定的な差異となっており、これを導きとして両者の思索の違いを明確化している。また本章においては、現代心理学の成果や知覚論的な次元で触覚を重視したバークリーの哲学を現象学的知覚論と比較対質しつつ、それらのなかにある現象学的思索態度を再評価することをも目指した。以上の論考を通じて、世界と人間主観との生きられた関係を解明している。

第二章においては、基礎的な次元の世界についてより詳細な解明がなされる。つまり、科学的世界を支配していた自然科学の法則とは異なるより根源的で基礎的な秩序を、現象学的な概念によって記述することが企図されている。その際、フッサールとメルロ＝ポンティが始源的な知覚世界を規定するときに用いる独自の概念群について詳細な検討を加えながら、考察が進められている。それらは、フッサールの「基盤」、「地平」、「類型」といった概念と、それらを引き継ぎメルロ＝ポンティ流に鋳直された「大地」、「地平の地平」、「スタイル」といった世界規定に関わる諸概念である。本章では、世界を規定する両者の概念を詳細に比較対質することによって、フッサールとメルロ＝ポンティの世界概念そのものの差異――「生活世界」と「生きられた世界」との差異――を明らかにすることを目指した。両者の差異を端的に要約しておけば、前者において世界は事物の総体と捉えられていた（フッサールには、世界を数量化して捉えようとする科学的客観主義の残滓が見て取

れる）のに対し、後者においては世界の階層的、重層的な構造が明瞭に意識されていたということである。そのことはとくにフッサールが世界を地平の総体としての「全体地平」と捉えているのに対して、メルロ＝ポンティがそれを「地平の地平」と表現しているところに明確に見て取れる。また、本章においては、始源的な知覚世界と科学的世界（像）との関係についても積極的な解明をおこなっている。この解明においては、フッサールにおける「生活世界の二義性」という問題と、メルロ＝ポンティの「野生の世界」という概念が詳細に検討されている。また、さきの始源的な知覚世界と科学的世界（像）の関係を検討したうえで、彼らが科学的世界（像）に対して呈示した始源的な知覚世界のもつ一般性はいかなる有効範囲を有するのかということが問われねばならない。つまり、始源的な知覚世界は科学的世界をはじめとするあらゆる人間的、文化的世界にとって共通の根となるようなものなのか、という問題である。解答を要約しておけば、フッサールは、科学の基底に横たわる「生活世界」の解明に際してヨーロッパ的な歴史性や文化性を考慮に入れたために、文化相対性にからめ取られている。フッサールがヨーロッパ的な理性を普遍的なものと考えていたことも、この問題に対する彼の姿勢に大きな影響をあたえているといえよう。これに対し、メルロ＝ポンティが『見えるものと見えないもの』において呈示した「野生の世界」という概念には、文化の相対性を超克するような意味が含まれている。この問題にかんしては、第三章でさらなる展開がなされる。

第三章では、第二章で論じられた始源的な知覚世界と文化相対性の問題を、より具体的に知覚論的次元で論究している。ここでは、われわれの知覚はいかなる意味で直接的なものなのか、という根本的な問題に触れねばならない。それは、現象学が不断に用いている「生まの知覚」、「始源的な知覚世界」、「直接的経験」といった概念を科学哲学の概念や現代の知覚心理学の知見を踏まえて検証することである。具体的には、ハンソンの「知覚の理論負荷性テーゼ」を導きの糸としている。というのも、このテーゼは知覚に対する理論や知識の認識論的な先行性を意味しており、ある意味では現象学において記述の対象とされている「生まの知覚」なるものを真っ向から否定するテーゼとして受け取ることもできるからである。本章においては、このテーゼの拡大解釈をもとに、知識や文化が知覚に及ぼす影響（知覚の文化相対性）の範囲を確定し明らかにした。その際、現代の知覚心理学者のなかでとくにナイサーとギブソンの知見をもあわせて検討した。前者は間接知覚説の代表者であり、後者は直接知覚説をとっている。ここで現代心理学に言及したのは以下の理由によるものである。つまり、「生まの知覚」とは「直接的な知覚」と言い換えることもでき、心理学的な知見に照合することによって、この＜直接性＞について現象学とは異なった角度からさらに詳細な検討を加えることができると考えたからである。科学哲学や知覚心理学を踏まえた以上の議論によって、フッサールの「生活世界」およびメルロ＝ポンティの「生きられた世界」ないし「野生の世界」の持つ現代的な射程が確定され、「知覚の文化相対性（あるいは知覚の文化負荷性）」というテーゼの有効範囲が限定されるのである。

本論文はこれまでの考察によって、フッサールやメルロ＝ポンティの議論を踏まえつつ、自然科学的知への過度な信頼に対する否認を端緒として、その知のアルケーである始源的な世界（下部構造）へと下降していった。しかし、現象学的思索は、知のアルケーへ向かうと同時にテロスへと向かう運動でもある。これは＜現象学における始源論（archéologie）と目的論（téléologie）＞と言い換えることができよう。したがって、本論文の次なる目的は、自然科学的な知にとってかわる現

象学的なロゴス（上部構想）を呈示することである。

第一章、第二章を通じて、直接的経験の世界が詳細に記述された。これは、ひとつには、客観的で唯一であると信じられていた世界像に亀裂を生じさせ、科学的世界の基底にあってそれの起源であると同時にそれを基礎づけていた、始源的な知覚世界の地位を確保することであり、もうひとつには、科学的法則に支配された科学的世界の有効範囲を限定することでもある。一方、科学的な秩序も始源的な知覚世界の秩序に根を持つことはこれまでの議論から明らかである。たとえば、幾何学は知覚世界を測る測量術から始まった。すなわち、理念化されて知覚世界と乖離する以前の幾何学の原型は、知覚世界と地続きであったといえる。幾何学はそうした測量術からある客観的な幾何学的秩序を得るようになる。しかし、幾何学が広く一般化していくと、あたかも自然そのものに幾何学的な秩序が内包されているかのような錯覚が起こった。換言すれば、それは、幾何学の持つ客観的な秩序――つまり科学的客観性――を世界が内包しており、そうした客観性が人間的主観性のあるなしにかかわらず世界に実在している、という幻想にほかならない。これは、客観主義あるいは科学主義という名で呼ばれていた。この欺瞞を暴くために、本論文はこれまでの論究を通じてこの数量化された秩序の衣を自然からはぎ取り、始源的な知覚世界を露呈させた。そこで、数量化による秩序の衣をはぎ取られた自然は、現象学的な用語で規定されるような構造を備えていることが明らかとなった。その構造は、自然科学の持っているような数量化された法則とはかけ離れているものである。しかし、科学的法則や認識が始源的な知覚世界の有する構造と異質なものであり、それが＜理念の衣＞として直接的な経験の世界を歪めていたとしても、前者が後者から生じてきたことは事実である。つまり、いわゆる科学的客観性を持った科学の認識も、直接的経験の世界の内部にある秩序を引き受け、展開されてきたわけである。したがって、客観的で堅固に思えた科学の客観的世界を現象学的に破壊したあとに残るのは、人それぞれによって異質でつねに移ろいゆくだけの規範のない世界ではない。そこで、近代の自然科学とは異なった手法で、始源的な知覚世界のなかにあるロゴスを見いだしていかねばならない。それは、客観性という概念が自然科学の手法によってしか獲得されないという科学主義的な幻想を打ち砕くためである。

第四章の第一の目的は、始源的な知覚世界のロゴスの内部にある科学の萌芽――客観性の萌芽――を確認することである。本論文では、この客観性の萌芽を＜知覚の客観性＞（これは、知覚的な世界とわれわれとのあいだにあるひとつの規範である）と名づけている。また、この＜知覚の客観性＞を解明し規定していく際、ローティーの記述に即して伝統的なふたつの客観性概念――意見の一致としての客観性（間主観性としての客観性）と実在との一致としての客観性――を導きの糸としている。第二の目的は、それとともに、知覚世界の内にある科学の萌芽から科学的客観性が生じる過程、つまり始源的な知覚世界から科学的世界への歩みを現象学的に素描することである。これは相対的な現象性の内部にある科学的客観性の萌芽を見いだすことにほかならない。以上のふたつの目的を遂行する際、具体的には、要素主義心理学、ゲシュタルト心理学、ギブソンの生態学的知覚論――ギブソンの知覚論からは「不変項」という概念について＜知覚の客観性＞との関連から詳細に検討を加えている――、メルロ＝ポンティの現象学から導き出すことのできる＜知覚の客観性＞という概念を検討している。とくに第二の目的である＜知覚の客観性＞と科学的客観性との関係の解明は、ギブソンの生態学的な知覚論とメルロ＝ポンティの現象学的な知覚論との直接的な比較対質を踏まえて遂行されている。ここでの議論のもうひとつの焦点は、知覚における生態学的な

側面と知覚の持つ創造的な側面を解明することである。

本論文の目的のひとつは、超越論的主観性の哲学であるフッサール現象学と、両義性の現象学から世界の超越性あるいは世界生を重視する哲学へ移行していったメルロ＝ポンティの現象学とを比較することを通じて、そこから鮮明に読み取れる差異を際だたせることである。両者の思想の比較は、これまでもとくに第一章、第二章において明確なかたちでなされてきた。それらに第三章を加えた部分は、おもに始源的な知覚世界と人間的主観性をめぐる両者の思索の差異を解明していた。以上はアルケーへと向かう始源論的な探求である。これに対して、第四章においては客観性が主題にされていた。いうなれば、これは目的論的な探求である。第五章では、この目的論的な探求の最終地点とも呼ぶべき理念性の問題を考察することを通じて、両者の差異をもう一度際だたせておくことにしたい。本章では、理念性をめぐる現象学的な考察を通じて現象学的なロゴスが示されている。とくに主題的に取り上げるテクストは、フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の付論である「幾何学の起源」とメルロ＝ポンティの『見えるものと見えないもの』に収められた「キアスム」の章である。これらのテクストはともに、理念性という主題を持つにもかかわらず、直接的に比較対質されることはこれまでほとんどなされていない。とくに本章では、始源論と目的論という本論文を貫く鍵概念を参照しつつ、理念性の問題を考察している。フッサールの理念性概念の特徴を一言でいえば、超越論的相互主観性の歴史的目的論による構成ということになり、メルロ＝ポンティのそれは、始源的な知覚世界や身体に内在する「相互反転性」という力動的構造を基盤とした目的論ということになる。また、本章においては理念性に関係して、言語の問題についても論じている。言語に対する両者のスタンスの違いが、理念性をめぐる思索の差異にも大きな影響をあたえているからである。とくにフッサールの理念性の探求においては言語が重要な役割を果たしているため、リシールはそれを「象徴的始源論」と名づけている。これに対し、メルロ＝ポンティの理念性は感覚的世界や芸術作品をモデルに探求されていくので、「感性的始源論」と呼ぶことができる。さらに本章の最終節においては、理念性と文化相対性の問題を考察することによってフッサールとメルロ＝ポンティの現象学の深度を測り、それを本論文の最終的な結論としている。

最後に補章においては、メルロ＝ポンティの現象学を単独に主題化し、彼の生涯の思索を貫いていた始源的な知覚世界の探求というテーマを＜知覚的な意味の起源と生成＞という観点から考察していく。これは本論文の基本的な主題に直接的に関わるものではないが、始源的な知覚世界の探求という点から見ても、またメルロ＝ポンティ現象学への注解という意味でも、本論の補足となるものである。具体的には、メルロ＝ポンティの後期思想において重要な位置を占める「＜存在＞」、「肉」、「多形現象」、「相互反転性」といった概念の意味を確定しつつ、メルロ＝ポンティの前期から後期への思索の深化と展開――二元論的な思考の規定にある共通の根へと至る思索――を＜意味＞という概念に焦点をあてながら探求したものとなっている。

論文審査結果の要旨

本論文は、メルロ＝ポンティの遺著の予定表題の一つ＜真理の起源＞を襲用しているように、知覚経験の始源層から想像的、言語的、知性的な理念が生起していく過程を記述したメルロ＝ポンティ

の目的論的探求を視軸にすえ、未完に終わったその<思惟されなかったもの>を捉え直し、進展させようと志したものである。全体の構成は、序章と本論五章、それに補章を加えた全七章から成っている。とくに第一、二、三章は始源論的な主題に、第四、五章は目的論的な主題に取り組んだ論考となっている。

第一章「人間存在の両義性」は、事象そのものへ向かう現象学の即事的な態度が定位する見ることの直知性と触れることの直接性というモティフを対称軸にすえ、世界に内属するとともに世界を構成する人間の両義的な在り方と、人間と世界の両義的な相互関係を解明している。そのためにまず、視覚と触覚のいずれが対象把握や空間定位において主導性を有するかという、古くからの哲学的 - 心理学的な問題が検討され、視覚は、世界から距離を取りそれを対象構成的に把握する人間の超越論的な存在様式を具現した感覚であり、触覚は、世界に内属し同位的に接触する人間の受肉的な存在様式を具現した感覚であることが際立たされている。しかも、奥行構造の現象や色彩知覚の実験や画家の体験証言から明らかにされるように、視覚もまたその原初的な発生層においては身体と世界との連帯性、接触性、相互性を示している。身体と世界の関係一般の基底に存するこうした接触的連帯性の位相においては、画家の視覚の革新や身体図式の更新が範例的に示しているように、世界の自生的なゲシュタルト化とそれに創造的に応ずる身体の機能形成との螺旋的 - 開放的な相互構成関係が見いだされる。こうして、真の超越論的なものが存する座は、フッサールにおける超越論的主観性でも後期メルロ＝ポンティにおける見るものと見えるものの母胎としての<存在>でもなく、世界と身体の創造的な相互構成関係そのものである、と結論されている。

現象学は高次に構成された科学的世界から、それによって忘却 - 隠蔽された始源である、知覚的生に相関的な現象世界へと還帰する。第二章「生活世界と野生の世界」は、こうした世界がフッサールとメルロ＝ポンティにおいていかに規定されるかをその同異において詳察している。つまり、フッサールにおいては信憑作用にとっての絶対的基盤、現前化作用にとっての全体地平、規定作用にとっての普遍的類型として志向分析的に規定され、メルロ＝ポンティにおいてはそれらが継承されながらも、身体と原初的な血縁性においてある母なる大地、あらゆる地平の地平、あらゆるスタイルのスタイルとしてメタ構造的に規定される、ということを解明している。つづいて、科学 - 文化の世界との関係において、前者の生活世界の二義性――文化以前の始源相としての狭義の生活世界と文化形成体を包含した具体的普遍相としての広義の生活世界――と、後者の野生の世界の根源性――あらゆる文化世界と知覚世界のうちに透視される感性的核、それらの多形性の母胎、したがって諸世界の世界――とを対質している。それを通じて、生活世界概念に含意される総体性格やヨーロッパ中心性に対し、野生の世界の可能的包越の性格や人類ないし生命一般への普遍的開放性が際立たされ、メルロ＝ポンティの世界概念への共感が示されている。

第三章「知覚世界と文化相対性」は、知覚の理論負荷性に関するハンソンのテーゼを拡張して、知覚は一定の歴史 - 文化的な知識に浸透され規定されるという、知覚の知識 - 文化負荷性のテーゼを提起し、そこから帰結する知覚の文化相対主義を現代の知覚心理学や認知心理学の検討を通じて確定するとともに乗り越えている。ギブソンに従えば、知覚は生態学的環境としての知覚世界に実在する不変項を直接に抽出することであり、ナイサーに従えば、知覚は知覚者の図式によって方向づけられ、その図式は新たな知覚経験を通じて修正され、この力動的な相互関係（知覚循環）が継続していくとされる。他方、民族誌認知心理学の実験データは、人間の知覚過程には文化要因に左

右されない共通層があることを明らかにしている。したがって、知覚循環によって変化していく経験的図式の基底には、文化的経験によって変わることのない種のアプリオリともいうべき知覚の原過程、原図式が存するのであり、ギブソンとナイサーの見解は補完的に統合 - 止場されることになる。こうした知識 - 文化に依存しない知覚固有のゲシュタルトゥングの次元、文化相対性の手前にある人類に共通の知覚世界の始源層こそは、現象学的 - 存在論的に捉えられるなら、フッサールの狭義の生活世界、メルロ＝ポンティの野生の世界にほかならない、と結論づけられている。　第四章「客観性の起源」は、知覚と知覚世界に固有の安定性や不変性のうちに客観性一般の起源を見いだし、その知覚的客観性から科学的客観性が成立する過程を追求しようとしている。論究の前提として、主観と対象の合致としての客観性１と諸主観の間での一致としての客観性２が区別される。ギブソンに従えば、知覚者は運動を通じて環境の変化のなかで不変項を生態学的実在として抽出的に捉えるが、これは客観性１に対応する。彼はさらに、環境風景の展開は同一経路の往復によって反復的、可逆的であり、このことは私と他者の間でも成り立つとする。その限り、客観性２は客観性１によって保証されている。メルロ＝ポンティにおいては、客観性１は知覚者と知覚対象の間で生起する最適の特権的な知覚様態であり、他方、幼児の対他関係によって証示されるように、人間一般に共通の基礎的な知覚 - 身体図式が間身体性ないし間主観性を、したがって客観性２を支えている。しかし、両者の客観性はいまだ関係づけられるに至っていない。これらの先行的見解をふまえながら、論者は、事物の間主観的知覚に関する具体的な現象分析によって、客観性１と客観性２の相互に保証しあう媒介関係を明らかにし、さらには、個別主観より以前の人間一般の世界適合性という種的アプリオリの水準に注目し、そこに存する原客観性においては対象への合致と間主観的一致とが同根源的に生起していることを透察している。こうした原客観性および知覚的客観性こそは科学的客観性の基盤、萌芽をなすものであり、前者から後者への発展過程についての目的論的な追求方途が素描されている。

表題の＜真理の起源＞は、客観性の起源とともにとりわけ理念性の起源を意味している。理念性とは一般に、時空的 - 因果的に規定される感性的個体の実在性と区別された、常に至るところで客観的に妥当する知性的普遍者の在り方を言うのだからである。第五章「理念性の起源」は、知覚的形象から想像的形態をへてこうした理念性に至る目的論的動向を辿りながら、フッサールとメルロ＝ポンティの比較を通じて理念性の概念規定、存立構造、形成媒介者、文化論的射程などの相違を浮き彫りしている。学的理念性の確保を関心事とするフッサールは、幾何学的理念が知覚 - 想像的に経験される形態類型から測量術による精密化をへて純粋な理念として理論化され、言語によって表現 - 伝達されていく過程を範例的に考察している。論者はそこから次のような特徴を引き出している。フッサールにおける理念性は、１）実在性から存在次元を異にして独立している。２）思考形成体として普遍的客観性を有する。３）言語を通じて反復的同一性において保持され伝達される。４）超越論的共同主観の目的論的構成運動の終極点である。他方、メルロ＝ポンティは、知覚世界の肉的な厚みに孕まれた軸や次元が、私と他者の相互反転性によって開かれる間身体性を場として――音楽的理念つまり楽想が範例とされるように――身重に昇華されていく過程を記述している。そこに見られる理念性は、１）感性的事実性から切り離されることがない。２）完全に透明に獲得された思考ではなく l'impensé として新しい可能的思考の地平的領野を開放する。３）パロルと同様に再創造的な捉え直しと乗り越えを促している。４）知覚論的間主観性における意味の設立 - 再設

立の弁証法的な開放的過程の途上にある。このように両者の対比的規定を洞察的に確定した後で、フッサールの理念性がヨーロッパ的理性 - 文化への目的論に固執するものであるのに対し、メルロ＝ポンティのそれは、諸々の理性と文化へ多形的に展開しうる開放的な目的論を内包することを明らかにしている。

以上のように、論者は現象学における始源論と目的論という拮抗的 - 補完的な問題領野を見ひらきつつ、フッサールとメルロ＝ポンティの思考動機――とくに従来主題的に解明されることのなかった後者の目的論的動機――を適確に比較考察し、現代の知覚 - 認知心理学の見解をも統合した問題設定によって、多くの堅実な知見とともに独創的な創見をも引き出し、確証している。もっとも、現象学者としては思想の比較研究から事象研究へさらに徹することが、また、個々に獲得された創見を組織化することが望まれる。しかし、こうした論究作業のうちにもすでに、テクストに対する精確な理解態度だけでなく創造的な主体的思考の姿勢が見うけらる。実際、本論文第一、二章に所収の二論文はそれぞれ、日本倫理学会・和辻賞を受け、現象学の国際雑誌 Analecta Husserliana に採択されるなど、すでに学会でも高く評価されている。今後のさらなる発展も大いに期待されるところである。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の 学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。